

2017年度事業報告書

公益財団法人 東洋文庫

2017年度 公益財団法人東洋文庫事業報告書

公益財団法人 東 洋 文 庫
理事長 榎 原 稔

2017年4月1日～2018年3月31日までに行われた公益財団法人東洋文庫事業の概要は下記の通りです。

事 業 目 的

公益財団法人東洋文庫は、全国の代表的な研究者よりなる東洋学連絡委員会の企画ならびに審議にもとづき、広く学界の要望に応える全国的な、また国際的な東洋学研究センターとして、資料センター・共同利用研究施設としての機能を果たすべく、必要な各種の事業を行うとともに、東洋学の不特定多数への広い普及をはかり、学術・文化・芸術の振興に寄与する。

事 業 項 目

概 要	2
I 調査研究	3
II 資料収集・整理	13
III 研究資料出版.....	15
IV 普及活動.....	16
V 学術情報提供.....	21

概 要

I 基本目的

東洋文庫は1924年に岩崎久彌氏により、モリソン(G. E. Morrison)コレクションならびに日本古典貴重資料を含む岩崎コレクションを中核とするアジアの貴重図書・資料に関する民間の研究図書館として創設された。その後92年間にわたり、一貫してこれらの貴重図書資料を散逸させることなく保存・管理し、同時に広く市民並びに世界の研究者に公開し、アジア諸地域の歴史文化に関する基礎資料を組織的かつ継続的に収集し、公開することを目的とした事業を進めてきた。研究事業の主たる目的は、これらの資料を収集・整理して、内外の研究者の利用に供するとともに、これらの資料にもとづく広範なアジア研究を推進して、世界のアジア研究の進展に大きく貢献することに置かれている。このような事業を250名に及ぶ研究員を擁して推進する類似の民間の研究図書館は国内には存在せず、世界的に見ても稀な例であり、アジア研究の長い伝統を有する東洋文庫が世界的に注目される理由である。

II 2012-2014年度の重点事業目標

東洋文庫は、この基本目的をさらに効果的に実現するために、2012年度からは、これらの基本的な課題を推進する中で、以下の点に一層重点を置いた事業を推進してきた。

- (1) 2011年3月11日の東日本大震災の教訓を踏まえ、貴重資料に関する書誌的資料研究をより一層強化し、併せて貴重資料の修復・保管・複製化・電子化という連続した資料保存とその公開をより系統的かつ持続的に推進する。
- (2) 大きく変動するアジア=世界情勢に対応する研究として、東洋文庫のすべての研究班の連携によって構成される「総合アジア圏域研究班」を設置し、主題研究、地域研究、資料研究を連結した「総合アジア圏域研究」を全アジア的視野から推進する研究体制を構築する。
- (3) 「総合アジア圏域研究」に伴う資料交流・人的交流・国際交流を一層推進し、研究成果を電子化などにより広く発信し、国際交流ならびに国際的な発進力を強化する。
- (4) 東洋文庫における資料研究・総合アジア圏域研究・国際交流・国際発信などの基本事業に不可欠な若手人材を育成する。

III 2015-2017年度の重点事業目標

東洋文庫の基本的な事業を継続的に推進するなかで、特に2015-17年度においては、アジア資料研究データベース構築をより効果的に進めると共に、各研究班によるアジア現地研究・資料調査と収集を行い、東洋文庫の刊行物ならびに各種講演・講習会ならびにミュージアムによる経常的な公開展示などの取り組みを通して、ひろく内外にその研究成果を発信する計画である。以下に今期の主要な事業項目を掲げる。

- (1) アジア資料研究データベースの構築
- (2) 資料調査・研究の推進と、それによる現地研究機関との共同研究の推進
- (3) 国際シンポジウム・ワークショップの開催による国際発信と国際交流の推進
- (4) 研究成果の刊行・発信の強化
- (5) 若手研究者の育成

これらを基本とし、以下の事業を具体的に行う。(1) 東洋学講座、(2) アジア言語資料ならびにアジア関連洋書資料に関するコーディコロジー(資料学)講習会、(3) すべての研究班による総合アジア圏域研究国際シンポジウムを各年に開催する。(4) 研究成果のデータベース化による国際発信を強め、(5) ハーバード・エンチン研究所ならびにECAF(European Consortium for Asian Field Study)を始め協定機関との国際連携を強める。とりわけデジタル図書館としての機能を高めるため、横断的資料検索データベース作成に取り組み、アジア各地域を地域横断的に、また歴史=現代的に比較検討し、アジア研究の総合的研究水準を高めることを目指す。これら重点目標の下に取り組みられた2017年度の事業報告を以下に記す。

I. 調査研究

東洋文庫における調査研究の位置付けは、系統的かつ継続的にアジアの各地域に関する現地の原語資料を収集し、それを現地の研究者・研究機関と共同して整理・編集し、併せて目録を作成し、世界の研究者の用に供することである。例えば、中央アジア研究においては、中央アジア出土のウイグル文書の編集を、ロシア・サンクトペテルブルクのロシア科学アカデミー東洋写本研究所との協力関係・信頼関係のもと共同で行い、20年間にわたり継続して目録を編集し、2度にわたって刊行している。同様に、協力協定機関であるアメリカ・ハーバード・イエンチン研究所や、台湾の中央研究院等との間で長年にわたって調査協力・国際共同研究・資料交換・人材交流等を行っている。このような研究機関相互の信頼関係に基づいて長期間にわたって行われる調査研究は、特定奨励費における基礎的資料調査研究の項目においてのみ行うことが可能であり、その他の競争的資金と性格を異にしている。

2017年度は、研究部に相原佳之氏を迎え、研究部の運営体制を強化するとともに、アジア研究の長い学問的伝統と国内外の研究ネットワークを有する東洋文庫の特徴を生かし、全3研究部門13研究班が20のテーマを設定した。そこでは、東洋文庫が収集・所蔵する一次資料の文献学的分析(解題・目録・訳註等の作成)と、それにもとづく基礎研究を持続的に進めることを基本とした。その上で、アジア諸地域の歴史と文化の地域連関と相互影響について、「総合アジア圏域研究」のもとに研究成果を連結し、アジア全体を視野に入れた学際的共同研究を推進して現代アジアの複合的・動的な把握につとめた。さらに、長期的には、そこから導き出された問題から新たな研究課題を創出し、歴史・社会・文化等、多角的な視野から解き明かすことを試みた。また、最新の研究成果を国際的に広く発信することで、世界のアジア研究の進展に大きく貢献することを目指した。アジア現地基礎資料の調査研究を基本とし、アジア諸地域の現地研究機関・図書館との学術交流を積極的に推進したことにより、新たな分野の資料群を探索・収集し、研究図書館としての東洋文庫の一層の充実が図られた。全3研究部門13研究班が取り組んだ20の研究テーマは下記のとおりである。

アジア資料調査・研究のための6部門13研究班20テーマ

部門	研究班	アジア資料調査・研究テーマ	略号		
超域アジア	総合アジア	総合アジア圏域研究(2)	—		
	現代中国	現代中国の総合的研究(3)	—		
	現代イスラーム	新中東・イスラーム圏における議会主義の展開と立憲体制を軸とする政治文化に関する総合的比較研究	—		
歴史文化研究	東アジア	前近代中国	中国古代地域史研究—『水経注』の分析から—(2)	東ア-1	
			東アジア都城の考古学的調査・研究(4)	東ア-2	
			中国社会経済史用語のデータベース化	東ア-3	
			前近代中国民事法令の変遷(2)	東ア-4	
	東アジア	近代中国	戦前・戦中期日本の華中・華南調査の研究	東ア-5	
			東北アジア	近世朝鮮記録類の総合的研究	東ア-6
				満族関係資料の研究	東ア-7
	東アジア	日本	清代東アジア・北アジア諸領域の歴史的構造分析:政治・社会・経済・民族・文化の展開	東ア-8	
			岩崎文庫貴重書の書誌的研究(3)	東ア-9	
	内陸アジア	中央アジア	古ウイグル語および関連諸語文献に関する研究	内陸-1	
			近現代中央ユーラシアにおけるイスラームと民族	内陸-2	
			敦煌・吐魯番資料に見る多元的宗教社会の研究	内陸-3	
		チベット	チベット語文献資料の基礎研究	内陸-4	
インド・東南アジア	インド	インド刻文史料の蒐集と研究(2)	南ア		
	東南アジア	近現代東南アジア史料研究	東南		
西アジア	西アジア	イスラーム地域の比較制度研究	西ア		
資料	東アジア資料	東アジア資料の研究(2)	—		



※歴史文化研究部門の各研究班・グループの資料調査地域を枠と略称によって示したもの

上記の研究テーマによる調査研究活動は、アジア各地の異なる言語や伝統的慣行に基づいて歴史的に形成された地域社会の構成分類と密接に関連するものであり、便宜上、研究班の形を取ってはいるものの、東洋文庫におけるアジア全域を視野に入れた全体の研究事業と不可分の関係にあり、アジア地域研究の基礎的な構成要素を成している。これは、他の競争的資金では実現が難しく、創設以来92年間の学問的伝統、資料の収集蓄積、および国内外の研究ネットワークを有する研究図書館として、東洋文庫が特定奨励費補助金によって実施するのにふさわしい事業である。なお、これらの活動を支える個別かつ短期的な研究活動については、特定奨励費補助金以外の競争的資金を積極的に活用した。

具体的には、上記の研究活動を、A. 研究データベースの構築、B. 資料調査・研究の推進、C. 国際シンポジウム・ワークショップの開催、D. 研究成果の刊行・発信の強化、E. 若手研究者の育成、の項目を設定して連携的に総合し、専任研究員がとりまとめ役となり、全アジア的規模の研究に取り組んだ。

調査研究における重点活動方針

A. 研究データベースの構築

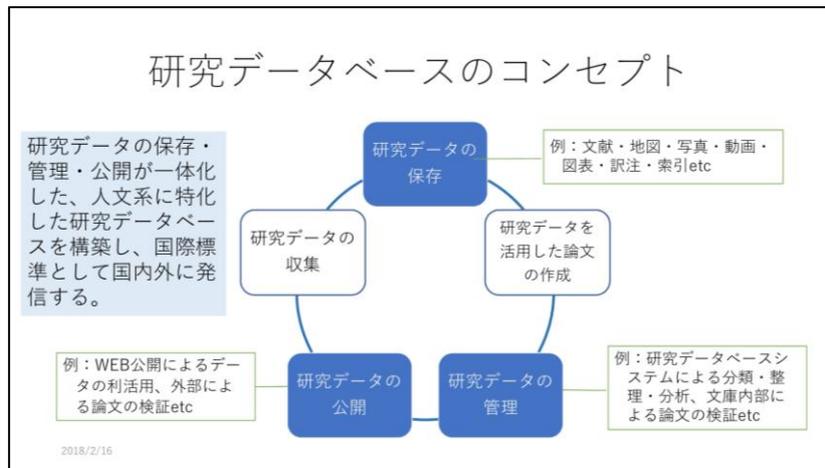
担当者： 研究部 會谷 佳光
相原 佳之
山村 義照

研究データベースの基本方針として、単なる書誌・画像・動画のデジタル化にとどまらず、東洋文庫の研究員・研究班の長年に渡る研究活動の成果について、史資料・写真・地図・パンフレット・論文・解題・訳注・索引（語彙・用語・固有名詞等）・研究ノートなど多様な形態の研究データを保存・管理し、複層的かつ横断的に検索可能な汎用性の高いデータベースを構築することを目指し、その対象となる書籍・論文・その他資料等へのリンクや、他機関との連携も視野に入れて検討を進めた。また、2015年度に設置した全研究班が参加する「研究データベース共同研究グループ」が中心となって研究情報発信検討委員会を開催し、研究対象地域別に選出された委員により、研究データベースの企画立案を行い、かつ進捗・公開状況について報告・協議した。

東洋文庫の研究成果の発信強化のため、東洋文庫リポジトリ「ERNEST」を一層充実させ、論文等の登録件数が計3,320件に達した (http://www.i-repository.net/il/meta_pub/G0000171kenkyu)。また東洋学講座等の講演会の情報や動画を登録する講演会アーカイブは394件に達した (<http://124.33.215.234/lecture/>)。

【研究実施概要】

総合アジア圏域研究では、新たに、東洋文庫現代中国研究資料室でデジタルライブラリーの構築を担当した相原佳之氏を研究データベース共同研究グループのメンバーに迎え、研究データベースの構築について、2015～2017年度の試行期から、2018～2020年度の開発期に移るための準備を行った。具体的には、試行期に提案やデータ収集・データベース開発・公開のあった各計画につ



て進捗状況の確認と見直しを行うと同時に、研究データベースのコンセプト(上図)と全体のタイムスケジュール(下図)を定め、若手理系研究者中村覚氏(東京大学情報基盤センター学術情報研究部門助教)等の協力を得て、次期の研究データベース開発に向けた検討を重ねた。



また、2018年2月16日、各研究班の運営委員をはじめとする研究員の参加を得て、アジア資料学研究シリーズ「文理融合型アジア資料学」研究講習会を開催し、會谷佳光主幹研究員が「アジア資料研究データベースの構築—研究データの保存・管理・公開に向けて」と題する研究データベースの構想について説明を行い、開発期に向けて東洋文庫全体で取り組むことを確認した。

細谷良夫研究員より寄贈された江戸時代に書写された『大明地理之図』4軸を素材に、地図上に記載された地名等の全情報4,199件をリスト化し、その途中経過について、2018年2月15日開催の東洋文庫地図研究会にて報告してデータベース構築の方向性等について議論を行った。

2015年度に作成した「新版唐代墓誌所在総合目録(増補版)データベース」(データ総数8,737件)を一般公開した(http://124.33.215.234/85_toyo2/sweb/sweb_index.html)。2017年9月～2018年3月のアクセス数は計22,232件であった。

現代中国研究では、資料グループが東洋文庫の蔵書中、約6,200点に及ぶ G. E. モリソン収集のパンフレット資料集を研究・整理しつつ、内外からの公開希望に即応できる DB に加工して、成果を公開する作業を進めた。

現代イスラーム研究では、「日本における中東・イスラーム研究文献目録データベース」のアップデートを日本中東学会と連携して継続し、新たに1,580件の文献情報を「イスラーム地域研究資料室サイト」に掲載し、総数は計56,120件となった。また、中東・中央アジアの歴史的に重要な諸法令を翻訳して順次データベース化していく作業の一環として、トルコグループでは粕谷元編『トルコにおける議会制の展開』(財団法人東洋文庫、2007年)所収のオスマン帝国憲法(1876年)・トルコ共和国憲法(1924年)、八尾師誠・池田美佐子・粕谷元編『全訳 イラン・エジプト・トルコ議会内規』(公益財団法人東洋文庫、2014年)所収のトルコ大国民議会内規(1927年)を適宜改訳するとともに、これらに注釈と解題を付す作業を進めた。イラングループでは、イラン憲法(1906年基本法と1907年補則)の翻訳作業に着手した。

東アジア研究では、前近代中国・近代中国・東北アジア・日本の4研究班を組織し、分担して研究データベースの構築に取り組んだ。

前近代中国研究班の中国社会経済史用語のデータベース化グループは、『中国社会経済史用語解』の増補作業の一環として、『法制篇』の用語解データベース編集作業を継続した。具体的には法制史の事典(辞典)・研究書・訳注から約一万項目の語彙を抽出して、用語解の基礎原稿を作成した。その際、『中国社会経済史用語解』(刊行本、データベース。 <http://124.33.215.236/yogokaiopen/index.php>)と同様、各語彙の用例上の広狭、一般語義と特殊語義の区別に即して検索できるよう、『法制篇』の範疇下に第1レイヤーから第3レイヤーまでの分類を順次施して整理した(2018年度にデータベース版下を公開の予定)。

前近代中国民法法令の変遷グループは、小川快之編「宋—清代法秩序民事法関係文献目録」(大島立子編『前近代中国の法と社会—成果と課題—』(財団法人東洋文庫、2009年)所収)について関係文献を増補し、これまでの目録情報と併せてデータベース化すべく、その準備作業を進めた。

近代中国研究班は、地域研究として発表された「華中」「華南」に関する諸研究に関する研究史整理を踏まえて、膨大な数に上る戦前・戦中期の日本による調査報告類を整理分類する作業を進めてきた。特に東洋文庫所蔵の資料を中心に、中国大陸に限らず、台湾及び香港での研究も視野に入れて、「台湾総督府文書」等の文献を中心に、メンバーおよび研究協力者による分析を試み、研究データベースの構築に向けた研究活動を持続的に続けた。さらに2018年度から開始する来期の事業計画の準備として、今まで収集した資料も含めて、東洋文庫所蔵の戦前戦中期の日本の研究機関等による中国調査とそこから派生する日本人の中国認識の特徴を整理するための研究計画を作成し、研究成果をデータベース化する際のポイントを検討した。

東北アジア研究班の朝鮮グループは、既刊の研究成果『日本所在朝鮮戸籍関係資料解題』(2004年)、『日本所在近世朝鮮記録類解題』(2009年)の情報をデータベース化して公開するためのデータ点検等を行った。

満族関係資料研究グループは、1980年代以来中国東北部、新疆ウイグル自治区、モンゴル、ロシア極東における調査で撮影・収集した満族(清朝)関係資料(写真、地図、パンフレット、文書等)について整理・研究を進め、その研究データベース化に向けて、中国絵はがき(日本やソ連/ロシアのものを若干含む)計937件のリスト化、および『尚氏宗譜』(全6巻)、『尚氏宗譜 白永貞書端』(全11巻付1巻)、『尚氏名諱録』、『千秋如在続(尚氏家則)』計2,525頁のPDF化を実施した。

清代東アジア・北アジア諸領域の歴史的構造分析グループは、研究データベースの拡充を念頭に、東洋文庫にのみ収蔵される文献資料類のうち、清朝の国家支配構造を反映している祭祀儀礼資料類の中から、特に文献史料として重要な意味を持つ『壇廟祭祀節次』を取り上げて、清朝の国家支配構造を反映する祭祀儀礼の総合研究の一環として、デジタル手法の導入による資料検証ならびに清朝宮廷儀礼の復元作業を、新たな長期研究課題として設定し、その基礎準備作業を進めた。クリスチャン・ダニエルズ研究員が雲南省で収集して東洋文庫に寄贈した碑文資料157件について目録データの作成を進めた。

日本研究班は、岩崎文庫の目録の整備・修訂を目指し、東洋文庫ホームページに公開されている岩崎文庫貴重書目録のメタデータをエクセル・ファイル化して、書誌情報の確認・修正を進めた。

内陸アジア研究では、中央アジア・チベットの2研究班を組織し、分担して研究データベースの構築に取り組んだ。

中央アジア研究班の古ウイグル語および関連諸語文献研究グループは、サンクトペテルブルクのロシア科学アカデミー(RAS)東洋写本研究所(IOM)のセリンディア・コレクション(SIC)に置かれたウイグル古文書研究グループと連絡を取り合いながら、すでに東洋文庫内の研究ネットワークに構築した同所のウイグル古文書目録第2版のデータベース(総データ数5,339件)について、約5,600点の断片類の表裏にわたる詳細な文字・言語・内容の新規追加を行った。また、データベースを構築したサーバがしばしば不調に陥ったことから、データベースの再構築とともに、サーバ機能の改善を実施した。

近現代中央ユーラシアにおけるイスラームと民族グループは、東洋文庫が最近収集した1991年のソ連解体前後の中央アジアの新聞資料、およびロシア革命前後の中央アジアにおける定期刊行物資料のデジタル化を行った。これらは、東洋文庫の基礎資料の充実に貢献するとともに、将来のデータベース化に備えたものである。

敦煌・吐魯番資料に見る多元的宗教社会の研究グループは、土肥義和研究員による長年に渡る世界の敦煌・吐魯番等文書の実物調査、その積読(積文作成)の成果物である多数のノートについて、貴重な情報や独自の積読・解釈の跡が確認され、その公開は学界にとって有意義であると認められることから、ノート内容の把握と文書との対象作業に取り組んだ。早急に整理を終えてデータベース化することで、研究員によって蓄積された研究データの保存・公開のモデルケースとして公開する予定である。

チベット研究班は、チベット人研究協力者の協力のもと河口慧海請来文献のうち手書きの筆記体写本を校訂し、電子テキスト・データベース計520頁を作成した。また、河口慧海請来文献のうち世界的に知られた写本大蔵経を電子データ化するための調査を行った。

インド・東南アジア研究では、**東南アジア研究班**が、明治期から第二次世界大戦前夜までの日本の東南アジア関係の文献を収集整理し、そのデータベース化を進め、インドネシアならびにそれを含む地域に関する文献については、ほぼデータベース化を完了させた(総数636件)。それらの文献の内容の概要を記すことで、東洋文庫の活動と連関する日本のアジア観の展開を研究するための基礎データを作成した。

東アジア資料研究では、動画データの充実を重点目標とし、中国祭祀演劇動画、中国講唱芸能動画、東アジア人類学動画の補充増強を行い、潮劇「三闖宮」「斬皇袍」「劉明珠」「趙少卿」、いずれも長編の動画を公開した(<http://124.33.215.236/movie/VIII-7/VIII-7.html>他)。

B. 資料調査・研究の推進

担当者： 研究部 會谷 佳光
相原 佳之
徐 小潔
太田 啓子

アジア諸地域における資料収集と地域研究の蓄積を持ち、内外の研究連携を進めてきた東洋文庫であるからこそ実現可能な特徴ある研究を、アジア全体を視野に入れて多角的に推進する。それとともに、アジアの現状と密接に関連する各民族の個性豊かな歴史と文化の研究に基礎的かつ長期的に取り組むため、地域別・時代別に、あるいは周縁諸地域との地域連関や相互影響関係を視野に入れた研究を推進する。さらに基礎資料研究、現地研究、主題研究など多分野間、かつ国際間の比較研究を行うことで、大きく変動するアジア＝世界情勢に対応する研究が可能となる。また、研究成果の検討・研鑽・発表の場として、東洋文庫内外の研究者や異分野の専門家・若手研究者を集めた研究会・講演会を開催する。

【研究実施概要】

総合アジア圏域研究では、東洋文庫等が所蔵するアジア・ヨーロッパ各地の書物に用いられた紙を対象に、精密顕微鏡による紙の分析調査を行い、その紙質・時代・産地等に関するデータを収集した。具体的には、『大明地理之図』、および清朝の皇史宬旧蔵の大紅綾本『康熙帝実録』に用いられた紙と彩色・枠線等に用いられた顔料の調査・分析等を行った。精密顕微鏡による資料の素材調査・分析は、2018～2020年度において、東洋文庫が学術団体として取り組む特色ある研究事業として重点化しているため、2018年2月16日、各研究班の運営委員をはじめとする研究員の参加により、アジア資料学研究シリーズ「文理融合型アジア資料学」研究講習会を開催し、徐小潔若手研究員、石塚晴通研究員、江南和幸研究員が精密顕微鏡による研究成果の具体例を報告するとともに、精密顕微鏡や簡易調査用のデジタルカメラの使用方法を説明するなど、文理融合型アジア資料学に東洋文庫全体として取り組むための土台作りを行った。

歴史地図研究については、東洋文庫内外の諸分野の専門家が参集して地図研究会を開催し、2017年7月19日に大澤顯浩研究員が「中国の山水図式地図」、高橋公明研究員が「『大明地理之図』の合成と分解」、2018年2月15日に高橋公明研究員が「系譜と合成—東洋文庫蔵『大明地理之図』」と題する研究報告を行い、活発な議論が行われた。

現代中国研究では、東洋文庫の現代中国研究資料室(人間文化研究機構・現代中国地域研究プログラム拠点、2016年度で事業終了)のデータベース公開の成果を活かしつつ、台湾中央研究院、国史館、華東師範大学当代中国研究センターなど海外の諸機関とも緊密に連携して、文献・図画像資料の調査、収集、整理につとめた。さらに、東洋文庫が所蔵するモリソンパンフレットを対象とし、これと同時代の海外、国内の関連資料とを相互に参照しながら学際的に研究し、合わせて各パンフレットの記述内容の英文要約を編集してDB公開する作業を進めた。

現代イスラーム研究では、2015年度以来、地域や国別に進展しがちな研究をより深化させるため、画期となる事件や事象について、地域や国を横断する構造変動と連関づけて議論するための研究セミナー「近現代の構造変動」を開催しており、2017年度は2017年12月2日に第5回「マグリブの政治変動」を開催した。私市正年(上智大学総合グローバル学部教授)の研究報告「アルジェリア政治体制の変容と現状—権力構造からの一考察」、鷹木恵子(桜美林大学リベラルアーツ学群教授)のコメントにより、マグリブにおける政治変動の諸論点や

諸課題がグループを横断して共有された。またトルコグループが「オスマン民法典(メジェツレ)」アラビア語版900条までの日本語翻訳・検討を行うとともに、語彙集の作成を並行して進めた。

東アジア研究では、前近代中国・近代中国・東北アジア・日本の4研究班を組織し、分担して資料調査・研究に取り組んだ。

前近代中国研究班では、古代地域史研究グループが、中国古代の地域社会の構造を検討するため、月2回の定例研究会を通して、『水経注』(原典6世紀、中国最古の地理書)を注文、疏文まで精読し、かつ考古学上の諸発掘成果や衛星地図などと合わせて歴史地理学的方法によって分析を行い、巻16穀水編の検討をほぼ完了し、2018年度の訳注刊行に目途をつけた。その一方、中国古代史研究に必須の簡牘研究にも取り組み、月2回の定例研究会を通して、張家山漢簡二年律令(津関令)を講読し、「境界」をテーマに多方面にわたって意見交換するとともに、山東省に出張して戦国斉の遺跡や山東博物館で開催された「書於竹帛」展での簡牘調査を行った。さらに新たに公開された『嶽麓秦簡』(肆)所載の律令について研究報告と討論を行った。

『モノ』に焦点を当てた研究として、東アジア都城の考古学的調査・研究グループは、中国、朝鮮半島、ロシア沿海州の都城・古城に関する文献の整理と内容の検討を行うと共に、中国東北地方、沿海州の渤海墓地遺跡について、関係の論文の翻訳や論文執筆を通して、これまでの研究の総括を行った。ロシア研究者の協力のもと、ロシア沿海地方における土城から検出された門遺構の集成とそれらの遺跡から出土した鍵・錠前の集成を行った。

中国社会経済史用語のデータベース化グループは、明代の《日用類書》シリーズに収まる法制・商業・算法・医学・仏教関係の史料と語釈に対し調査・研究を行ってきたが、その中から『新刻天下四民便覧三台万用正宗』の巻8〈律令門〉・巻21〈商旅門〉・巻22〈算法門〉についての訓読と語釈を終えたので、2018年度に『三台万用正宗訳注(Ⅰ)〈律令門〉〈商旅門〉〈算法門〉』と題してデータベース公開し、語釈を付した用語を編集して2019年以後の「増補版中国社会経済史用語解」の作成と公開に備えた。『唐宋編年史料語彙索引(Ⅰ)』(http://124.33.215.236/tosohennen/tosohen_query_input.php)の増補作業とともに、同じく梅原郁氏寄贈の「元明時代社会経済史用語索引資料」約4万件の編集作業の準備を始めた。以上の一連の〈中国社会経済史用語解〉作成作業は、東洋文庫の開設以来一貫して行われ蓄積されてきたものであって、中国前近代における基層社会の重要語彙に対する調査研究の蓄積をベースとし、さらに発展させる努力である。加えて、語彙検索の工具としての在来の中国製、日本製の辞書が集録する用語は、伝統漢学を解読する工具にとどまるものが大半を占め、社会経済の日常生活の史料である俗語・俗文、ないし雅俗を混用した語彙ないし文章を読み解くための工具の提供が著しく不足してきた。本計画は、中国基層社会の実態を究明するための工具を作成し、これを《電子辞書》として公開することを目指している。

前近代中国民法法令の変遷グループは、2016年度以来進めてきた『中国近世法制史料読解ハンドブック』(仮題)がほぼ完成し、2018年度に刊行する目処を付けた。本書は、大学院生・若手研究者が東洋文庫所蔵の中国法制関係の史料を用いて「法と社会」の研究を行うための入門ハンドブックとして作成するものであり、本書を通して法制史料の基礎読解能力を体得することが期待される。このことは中国法制史・法社会史研究の継承・発展にとっても非常に有益である。

近代中国研究班は、前年度に引き続き、南京大学や中山大学、華東師範大学等、現地で戦前・戦中期の日本側史料を活用している中国人研究者・研究機関との学術交流を実施し、「華中」「華南」地域の実態に関して先端的研究内容を踏まえて把握した。また、上海社会科学院の研究者等とも学術交流を実施し、20世紀の日本人が持った中国認識の実像を明らかにするとともに、当該期の中国の学界における日本の中国研究に関する関心と分析等も検討することができた。さらに日本では研究が手薄であった日本海軍関係の機関による海南島を中心とした「華南」調査に関して、台湾の中央研究院の研究者の援助を得て、資料収集とその歴史的意味について検討を実施した。また戦後日本の学界でほとんど利用されることがなかった台南市立図書館の日本語資料に関する調査も実施した。

東北アジア研究班の朝鮮グループは、『日本所在近世朝鮮記録類解題』(2009年)の増補改訂版の編集・刊行を目指して追加調査を実施した。具体的には、これまでの調査で得られた各種文献記録類の書誌情報の再整理・再点検を行い、未調査の関連文献の所蔵機関等と対象文献記録類のリストアップ作業を行った。

満族関係資料研究グループは、清代満洲語文書、とくに東洋文庫所蔵「鑲紅旗檔」の研究を継続実施した。さらに、国際学術交流の一環として、中国を代表する満洲語文書の研究機関である吉林師範大学満族文化研究所との研究連携の準備を進めた。

清代東アジア・北アジア諸領域の歴史的構造分析グループは、準備途上のまま未刊となっている【TBRL:『清代諸領域の歴史的構造分析』1/清朝初期政治史研究(1)】を2019年度に、【TBRL:『清代諸領域の歴史的構造分析』2/清朝祭祀儀礼研究(1)『壇廟祭祀節次』】を2020年度に出版するための準備を進めた。

海外から写真方式で蒐集した『清代旗地則例』漢文版の公開に続き、清代政治・経済・民族・文化の各専門研究領域をもとに、海外の図書館・檔案館・研究機関等に所蔵される檔案文献史料類のひとつ『鑲紅旗檔』の嘉慶年間までの檔案類について、マイクロフィルム方式や新たなデジタル化方式による整理・分析作業に関する検討を進めた。

日本研究班は、既刊『岩崎文庫貴重書書誌解題』I～VIIIに引き続き、IXとして2018年度の公刊を目指し、岩崎文庫所蔵の芸能関係の古典籍について書誌研究を実施した。同文庫の目録では、謡曲・狂言・歌舞音曲・猿楽・幸若舞曲の名称で、これまでの解題に取り上げられていない資料がなお35点ほどあり、それらを中心に周縁分野の資料を合わせ約100点について書誌解題の執筆を進めた。合わせて、デジタル画像のデータベース公開に向け、撮影箇所を選定作業に入った。

内陸アジア研究では、中央アジア・チベットの2研究班を組織し、分担して資料調査・研究に取り組んだ。

中央アジア研究班の古ウイグル語および関連諸語文献研究グループは、ロシア科学アカデミー(RAS)東洋写本研究所(IOM)との国際共同研究のもと、ウイグル古文書資料に関する基礎研究を継続して実施した。具体的には、IOM内のセリンディア・コレクション(SIC)部門におかれたウイグル古文書研究グループと連絡を取り、先方にとって実現性が高いと思われるデータ交換条件などを提起するとともに、東洋文庫が将来的にファクシミリ付きの包括的なカタログのWEB公開を目指していることを伝達した。班員が古文書の内容に関する個別研究、比較の成果を個別論文の形で発表し、かつ出土古文書に関する諸情報を共有し、研究班の成果を若手研究者等と共有するため、東洋文庫以外の機関・研究者との交流を行った。

近現代中央ユーラシアにおけるイスラームと民族グループは、2018年3月に濱本真実研究員をカザフスタン共和国アルマトウの国立文書館に派遣し、近代中央ユーラシアにおける通商と情報交換に関する第一次史料の収集を行う一方、カザフスタンの研究者との交流を拡大した。

敦煌・吐魯番資料に見る多元的宗教社会の研究グループは、「濱田徳海敦煌文書関係コレクション」の整理と考察に重点を置いた。濱田徳海氏は戦前、中国に派遣された大蔵省の官僚で、その中国滞在中、また帰国後の日本で敦煌文書の収集に努め、180点余のコレクションを築いた。戦後、濱田氏の没後、コレクションの売却が話題となり、40点余が国立国会図書館に収まったが、その際に全容の把握などに東洋文庫関係者が関わったと推定され、幾つかの目録などの資料が残されていた。近年、立正大学の岩本篤志氏が濱田コレクションの考察を進めているものの、文庫に残された資料はその考察を大きく超える内容であり、そこで明らかになった全体像について今後研究会や『東洋文庫書報』等で公表する予定であり、その上で、そのデータ(資料目録)をデータベース化して公開することを検討した。また、課題であった内陸アジア出土古文書研究会の定常化を実現し、全11回を開催した。報告には多くの若手・中堅研究者を起用し、国外の研究者・留学生も加わって、着実な議論の前進がなされた。

チベット研究班は、近年中国・インドなどで新たに刊行されたチベット語写本の影印版、チベット仏教美術の写真版、チベット語大蔵経文献、蔵外文献の電子版を収集した。また、2018年度以降の成果刊行に向けて、トウカン『一切宗義』の翻訳研究、中央アジア出土チベット語文献研究、ウパロセル著『テンギユル目録』、チベットの文学作品の翻訳研究を継続した。

インド・東南アジア研究では、インド・東南アジアの2研究班を組織し、分担して資料調査・研究に取り組んだ。

インド研究班は、東洋文庫で従来収集していない史料のうち、国内で収集が困難な出版物、特にインドの主要な文書館、あるいはヨーロッパ(イギリスのBritish Library)の資料を調査し、それぞれの専門の分野で、研究データの整理を進めた。班員が、研究成果のWEB公開を視野に入れて、古代・中世の歴史に関して、インドにおけるそれぞれの分野の歴史的変遷と関連させて資料研究に取り組んだ。

東南アジア研究班は、研究会を開催し、近現代ならびに前近代の東南アジアの都市の成り立ちや構築したネットワーク、社会統合に果たす役割について検討した。植民地期の東南アジアの都市は、後の新生国家の基盤だけでなく、外来系住民の帰属意識やエスニシティ問題などを生み出す背景も醸成した。2017年度は、東洋文庫が豊かな関係資料を有するインドネシアのアラブ系住民の動向や、東南アジアのムスリムと中東のムスリムの交流について、重点的に検討した。その研究成果を、2018年度にTBRLシリーズより*The Development of Urban Society in Southeast Asia from Historical Perspectives* (仮題)と題して刊行する計画を固めた。ま

た前近代の都市の役割を検討するための重要な資料となる、東洋文庫所蔵の故仲田浩三氏の東南アジア島嶼部を中心とする碑文拓本と関係資料の整理を進めた。その目録『東南アジア島嶼部を中心とする碑文拓本と関係資料』を、2019年度に刊行することを確認した。

西アジア研究では、東洋文庫所蔵のヴェラム文書(皮紙に書かれたモロッコの契約文書、16～19世紀)の研究を継続し、2014年度に購入した皮紙11点のヴェラム文書のうち、フェスに関する文書7点について、月例の講読会を開催し、アラビア語校訂テキストを作成するとともに、各文書の内容を解説した。2019年度に研究成果として、校訂・研究を出版する予定である。

東アジア資料研究では、中国、台湾、香港、東南アジアなどに所蔵される文献資料、現地調査資料の探索、図書館、資料館との間に国際的情報交換、資料交換、人的交流を促進することの一環として、2006年から続く台湾中央研究院歴史語言研究所との間の資料交換協定を2018年3月30日付で3年間延伸する合意書を取り交わした。

各種研究会・講演会の開催状況は、下記のとおりである。

件数/人数	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
研究会数	17	22	20	29	12	18	11	11	19
参加人数	149	199	157	339	99	154	94	108	239

1月	2月	3月	計
23	24	22	228
215	209	163	2,125

C. 国際シンポジウム・ワークショップの開催による国際発信と国際交流の推進

担当者： 研究部 山村 義照
徐 小潔
太田 啓子

資料調査・研究のために必要な情報を収集し、国際的な共同研究を推進し、かつその研究成果を対外的に発信することを目的に、年1回共通テーマのもとにアジア諸地域の地域比較・相互影響の解明に焦点を置いた国際シンポジウムを開催した。また、この国際シンポジウムの運営に若手研究員を携わらせることで、最新の研究動向の入手や国際的な人脈形成等を支援し、国際的に活躍可能な人材へと育成することに努めた。

2017年度は、モリソン文庫渡来100周年を記念する国際シンポジウム「碩学が語る東洋学の至宝のすべて」(2017年12月16日)を開催し、報告者・関係者含め61名が参加した。斯波義信文庫長の開会の挨拶のあと、平野健一郎普及展示部長の司会進行により、メルボルン大学のクレア・ロバーツ氏が豊富な写真資料と動画を用いて北京でのモリソンファミリーの生活について報告し、上海社会科学院の馬軍氏がモリソン文庫が日本に売り渡された際の中国側の反応について詳細に報告した。午後には濱下武志研究部長の司会進行により、田仲一成図書部長、岡本隆司研究員がそれぞれ編集を担当した記念刊行物『モリソン文庫貴重古籍目録』および『改訂増補モリソンパンフレットの世界』について報告したのち、中見立夫研究員、フランス国立極東学院のフランソワ・ラショー氏等を交えてパネルディスカッション(上図)を行い、モリソン文庫について様々な観点からその魅力と価値について討論が行われた。



また、各研究班の主導により、下記の国際シンポジウム・ワークショップを開催した。

【研究実施概要】

現代中国研究では、国際関係・文化グループが、2017年12月2～3日に華東師範大学(上海)との共催で第

6回中国当代史に関する日中共同研究ワークショップを開催した(<http://www.tbcas.jp/ja/20171202WS.pdf>)。また政治グループが台湾の研究者3名を招聘して、2018年3月1日に国際ワークショップ「中国の外交と国際関係」を開催した。

D. 研究成果の刊行・発信の強化

担当者： 研究部 中村 威也
小澤 一郎

資料調査・研究の検討過程や研究成果、および国際シンポジウム・ワークショップの内容を紙媒体・電子媒体によって発信した。特に国際シンポジウムはその速報性を重視して、開催年度にオンラインジャーナル *Modern Asian Studies Review* (<http://www.toyo-bunko.or.jp/research/MASR.html>) で概要を発信した。また、従来の和文・欧文による発信を一層推進するとともに、新たに中国語による発信を加えることで、多言語による研究成果の国際発信力を強化し、資料交流・人的交流・国際交流に資すべく取り組んだ。

長期的・計画的にアジア研究の基礎的な成果を出版していくと同時に、最新の研究成果ばかりでなく、原典的な研究書を系統的に翻訳してオンラインジャーナルで公開することについても検討を進めた。

東洋文庫リポジトリ「ERNEST」は、2015年度より、国際情報学研究所(NII)が運営する学術機関リポジトリデータベース(IRDB)に参加することで CiNii Articles (<http://ci.nii.ac.jp/en>) で検索できるようになり、その発信力を高めているが、登録論文の一層の充実に取り組んだ。

編集業務に習熟した嘱託職員を採用して、研究成果の発信に際し、紙媒体・電子媒体の別なく、ハイレベルな校閲を行い、研究成果の質的向上をはかった。

【研究実施概要】

モリソンコレクション渡来100周年記念プロジェクトとして、*A Classified Catalogue of The Morrison Library in Toyo Bunko vol.1*、『改訂増補 モリソンパンフレットの世界』を刊行した。

現代中国研究では、2016年9月24日に東洋文庫で開催した総合アジア圏域研究第4回国際シンポジウム「アーカイブの内と外—当代中国研究の新展開」の論文集を、『展望当代中国研究—档案資料的内与外』と題して中国語(簡体字)版で刊行した。また、モリソンパンフレットの研究の基礎の上に、公益財団法人東洋文庫監修・岡本隆司編『G・E・モリソンと近代東アジア—東洋学の形成と東洋文庫の蔵書』(勉誠出版、2017年9月)を一般向け書籍として出版した。

東アジア研究の近代中国研究班では、『近代中国研究彙報』第40号を刊行し、班員が収集した資料を紹介すると同時に、「台湾総督府文書」の調査から明らかにされた戦前戦中期の日本人の中国認識の現状と問題点を整理した。

内陸アジア研究では、中央アジア研究班の近現代中央ユーラシアグループが、2015年末に東洋文庫で開催した国際学術会議の成果報告として、ONUMA Takahiro, David BROPHY and SHINMEN Yasushi, eds., *Xinjiang in the Context of Central Eurasian Transformation* (TBRL18)を刊行した。また、チベット研究班が、*Studies in Tibetan Buddhist Texts, Vol.2: The dBu ma tshig gsal gyi ti ka by Zhang Thang sag pa 'Byung gnas ye shes. Part II*を刊行した。

西アジア研究では、2015年12月5日・6日に東洋文庫で開催した総合アジア圏域研究第3回国際シンポジウムをもとにした英文論集 *Comparative Study of the Waqf from the East: Dynamism of Norms and Practices in Religious and Familial Donations*(TBRL19)を刊行した。

E. 若手研究者の育成

担当者： 研究部 會谷 佳光
山村 義照
相原 佳之

東洋文庫における資料調査・研究、国際交流、国際発信などの基本事業に不可欠な若手人材の育成に取り組んだ。

英語・中国語等の外国語に堪能な若手研究者を嘱託職員として採用し、総合アジア圏域研究班の研究活動・国際シンポジウムの運営・国際交流事業に携わらせることで、最新の研究動向の入手や国際的な人脈形成等を促し、国際的に活躍できる人材の育成に努めた。

内外の若手研究者が国際的に活躍できるスキルを身につけることを支援するため、2017年10月12日、外国人講師ポール・クラトスカ氏(シンガポール国立大学出版会編集長)を講師に迎え、「英文による成果発信支援セミナー」を開催し、若手研究者10名の参加を得た(右図)。

東洋文庫には、かつて首都圏在住の大学院生・若手研究者の史料読解能力を養成するという重要な役割があった。専門研究領域が多様化し、各大学で個々の研究者が指導するには少なからず限界がある現在にあっては、東洋文庫

におけるインターカレッジ的な育成の必要性がいよいよ増大している。そこで、各研究班が主催する研究会・セミナー・講演会等において、大学生・大学院生や若手研究者の積極的な参加を促した。

上記の諸活動により、アジア研究の国際的な発信拠点・交流拠点として、国際的に活躍できる若手研究者を養成し、それによって東洋文庫の研究活動を将来に渡って継承・発展させるべく努めた。それと同時に、積極的な普及・啓蒙活動によって研究成果を社会に還元すべく取り組んだ。

【研究実施概要】

現代中国研究では、2017年12月2～3日に華東師範大学(上海)との共催で開催した中国当代史研究ワークショップにおいて、若手研究者の報告者を募り、2名が日本側の推薦枠で研究成果の発表を行った。また、定例の研究会では書評会や研究報告に若手研究者の登壇を積極的に促し、分野の異なる若手研究者間の交流を進めた。さらに、海外の若手研究者との交流促進の一環として、汪精衛研究で知られる李志毓(中国社会科学院近代史研究所・副研究員)氏を北京から招き、日本の若手研究者との交流の場を設けた。

東アジア研究では、**前近代中国研究班**の古代地域史研究グループによる月4回の定例研究会には、毎回10名前後の若手研究者が参加しており、彼らに基礎的な報告を委ね、さらに研究員の討議を加えることで、若手研究者の育成に貢献した。研究会には海外の研究者や留学生も加わり、国際的な学術交流に貢献した。

中国社会経済史用語のデータベース化グループが開催した月例研究会では、湖州地方における農業の状況や農民の経験を収録した『沈氏農書』『補農書』の研究訳注が大川裕子氏によって数回に渡り報告されるなど、若手研究者も明代の《日用類書》を含む基層社会研究をテーマとした報告を行い、各世代の研究者を交えた活発な議論が交わされた。

近代中国研究班は、若手研究者の協力を得て、戦前戦中期の日本の研究機関による調査資料の収集と分析を進めた。2018年度からの次期事業計画に向けて若手研究者吉田建一郎氏を班員に迎えた他、東洋文庫で受け入れた日本学術振興会特別研究員PDをはじめとする若手研究者に対して指導を行った。

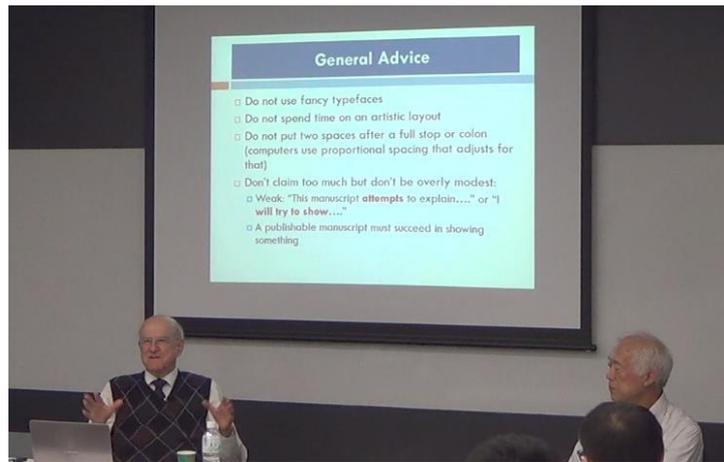
東北アジア研究班の清代東アジア・北アジア諸領域の歴史的構造分析グループは、若手研究者を育成する一貫として、東洋文庫アカデミア『論語』で学ぶ満洲語—文献資料類を読むための満洲語文語入門』を実施し、特に満洲語文献資料を活用して研究するスキルを持つ若手研究者の育成に貢献した。

内陸アジア研究では、**中央アジア研究班**の近現代中央ユーラシアにおけるイスラームと民族グループは、2018年3月に若手研究者の濱本真実研究員をカザフスタン共和国アルマトウの国立文書館に派遣して第一次史料の収集を行う一方、カザフスタンの現地研究者との交流を行った。

チベット研究班は、研究とその成果の刊行にあたり、若手研究者を協力者に加えて指導しながら共同研究を行い、*Studies in Tibetan Religious and Historical Texts* シリーズの第2巻を刊行した。

インド・東南アジア研究では、**東南アジア研究班**が2018年度出版予定の英文刊行物に、2015年度の研究会で報告を行った3名の若手研究者の論文を収録することとした。また研究班の活動の活性化のため、新たに若手研究者山口元樹氏を加え、2017年度の研究会で報告の機会を与えた。

西アジア研究では、京都外国語大学と連携して中央アジア古文書研究セミナー(第15回、2018年3月)、および東京外国語大アジア・アフリカ言語文化研究所と連携してオスマン文書セミナー(2018年1月)を実施し、若手研究者による文書研究の育成に寄与した。



II. 資料収集・整理

超域研究、歴史・文化研究を実施するとともに、アジアの現状および歴史に関する一次資料(写本、古文書、古文献、地図、統計、調査記録など)、専門研究書、定期刊行物を収集し、世界に誇る東洋文庫の既存資料をさらに増補・拡充した。収集した資料は、速やかに整理して電子情報化し、アジア学資料センターとしての機能強化を推進した。

上記の計画にもとづいて収集した資料は、分類・整理を経て、書誌情報のデータベース化と全文テキストおよび画像情報のデジタル化を推進し、オンライン検索サービスにより内外の研究者に広く公開した。

また東洋文庫の所蔵資料のうち、欧文の古文献、貴重漢籍や国書(日本関係書籍)、絵画・考古資料等については、重点的かつ系統的に修復・複製化を進め、永久保存をはかるとともに、それをデジタル・アーカイブに加工し、広範な利用の目的にもかなうようにした。

以上の活動を推進するため、書誌学的にも通曉した人材の育成と、アジア資料学の構築を目指し、東洋文庫独自の若手人材育成という課題に取り組んだ。

A. 資料購入

超域アジア研究、アジア諸地域研究、資料研究において必要とされる一次資料を中心に購入を進めた。購入冊数は下記の通りである。

区 分	和漢書	洋 書	その他
総合アジア圏域研究	8 冊	0 冊	6 件
超域・現代中国研究	91 冊	0 冊	10 件
超域・現代イスラーム研究	0 冊	502 冊	0 件
東アジア研究	198 冊	8 冊	0 件
内陸アジア研究	44 冊	49 冊	0 件
インド・東南アジア研究	0 冊	44 冊	0 件
西アジア研究	0 冊	248 冊	0 件
共通(継続・大型資料)	906 冊	161 冊	0 件
合 計	1,247 冊	1,012 冊	16 件

B. 資料交換

国内外各提携機関との間で資料交換を進めた。

区 分	受 贈				寄 贈		
	和漢書	洋 書	その他	計	和漢書	洋 書	計
単行本	1,916 冊	794 冊	160 冊	2,870 冊	483 冊	1,142 冊	1,625 冊
定期刊行物	998 冊	1,114 冊	18 冊	2,130 冊	4,488 冊	808 冊	5,296 冊
計	2,914 冊	1,908 冊	178 冊	5,000 冊	4,971 冊	1,950 冊	6,921 冊

C. 資料保存整理

2017年4月1日～2018年3月31日までの期間における保存整理作業は、下記の通りである。

保存整理作業として、保存環境の整備、虫病害の対策に努めるとともに、破損資料の修理・修復、洋書革装本の保全処置、保存容器の作製などを行った。本年度は昨年度に引き続き、ミュージアムでの展示資料を初めとする和・漢・洋古典籍(モリソン文庫・岩崎文庫ほか)を中心に作業を行った。

- ・逐次刊行物合冊製本(外注) 243 点
- ・修理・修復(破損による再製本を含む)

洋書	390点
和漢書	195点
・簡易補修	72点
・革装本の保全処置(HPC塗布など)	428点
・保存容器(外注含む)	233点
・マイクロフィルム劣化防止作業	69件

Ⅲ. 研究資料出版

A. 定期出版物刊行

- | | | |
|--|-----------|----------------|
| 1. 『東洋文庫和文紀要』(東洋学報) | 第99巻第1-4号 | A5判 4冊(刊行済) |
| 2. 『東洋文庫欧文紀要』
(<i>Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko</i>) | No.75 | B5判 1冊(刊行済) |
| 3. 『近代中国研究彙報』 | 第40号 | A5判 1冊(刊行済) |
| 4. 『東洋文庫書報』 | 第49号 | A5判 1冊(刊行済) |
| 5. <i>Modern Asian Studies Review</i>
／新たなアジア研究に向けて | Vol.9 | オンラインジャーナル(公開) |
| 6. <i>Asian Research Trends New Series</i> | No.12 | A5判 1冊(刊行済) |

B. 論叢等出版

- | | | |
|---|--|-------------|
| 1. 『展望当代中国研究—档案資料的内与外』(中国語) | | A5判 1冊(刊行済) |
| 2. <i>Xinjiang in the Context of Central Eurasian Transformation</i> (TBRL18) | | B5判 1冊(刊行済) |
| 3. <i>Studies in Tibetan Buddhist Texts ,Vol.2 : The dBu ma tshig gsal gyi ti ka by Zhang Thang sag pa 'Byung gnas ye shes. Part II</i> | | B5判 1冊(刊行済) |
| 4. <i>Comparative Study of the Waqf from the East: Dynamism of Norms and Practices in Religious and Familial Donations</i> (TBRL19) | | B5判 1冊(刊行済) |
| 5. <i>A Classified Catalogue of The Morrison Library in Toyo Bunko vol.1</i> | | B5判 1冊(刊行済) |
| 6. 『改訂増補 モリソンパンフレットの世界』 | | B5判 1冊(刊行済) |

IV. 普及活動

研究資料の収集・情報公開および研究促進のために、国際交流の進展に努めた。また、超域アジア研究と歴史・文化研究の成果について、春秋の講演会・展示会等によって一般公開するとともに、招聘研究者および来日中の著名な外国人研究者による公開講演会を開催した。

A. 研究情報普及

1. 東洋学講座

春秋2期、年6回実施した。

(前期)

第560回7月24日(月)

「トルコ大国民議会議録から見るオスマン帝国の滅亡」 東洋文庫研究員 粕谷 元 氏

第561回7月27日(木)

「18～21世紀ウルムチ(烏魯木齊)の歴史的変容—中央ユーラシア史の中の新疆」
東洋文庫研究員 新免 康 氏

第562回7月31日(月)

「房山雲居寺石経」に刻印された唐代仏教社会」 東洋文庫研究員 氣賀澤保規 氏

(後期)

第563回11月27日(月)

「三角測量(日・仏・越)から見るベトナム」 早稲田大学教授 坪井善明 氏

第564回11月29日(水)

「ヨーロッパから見た東洋のイメージ—ルネサンスから20世紀まで」
日仏東洋学会代表幹事
元フランス国立極東学院東京支部長 彌永信美 氏

第565回12月1日(金)

「『好古家』と『畸人』の時代—近世期の知的ネットワークと学問の形式に関する一考察」
フランス国立極東学院教授東京支部長 フランソワ・ラショー 氏

2. 特別講演会

主として来日中の著名な外国人研究者を招いて実施した。

5月27日(土)

「東洋文庫與中国学术界之關係(1924—1945年)」 上海社会科学院歴史研究所研究員 馬 軍 氏

7月9日(日) 国際ワークショップ「18世紀オスマン帝国における社会変容」

Morning Session

Opening remarks: Jun Akiba (Toyo Bunko, Japan)

Shirine Hamadeh (Rice University, USA): Invisible City: Subversive Alliances, Spaces of Opportunities, and the Bachelors of Istanbul (1700-1840)

Madoka Morita (The University of Tokyo, Japan): Neighborhoods Becoming Territorial: Marriage Contract, Religious Communities, and Local Leadership in Eighteenth-Century Istanbul

Afternoon Session

Sophia Laiou (Ionian University, Greece): Within and Outside the Ottoman System: The Orthodox Subjects of the Sultan and their Participation in the Ottoman Economy.

Ali Yaycioglu (Stanford University, USA): Order with Disorder: Liability, Partnership and Volatility in Ottoman State-Society

Jun Akiba (Toyo Bunko, Japan): Ankara, Sarajevo, and İbradi: Rise of Kuzat Families in the Ottoman Provinces

Discussion

Closing remarks: Jun Akiba

8月4日(金)

「誕生日の誕生」(中国語原題「中国人如何開始過生日的?」) 清華大学歴史系教授 侯 旭東 氏

9月2日(土)

“The habitat in the Bukhara oasis and its evolution since the Late Antiquity to the Medieval period”

Archaeologist, Louvre Museum, Department of Islamic Art Rocco Rante 氏

9月23日(土)

「汪精衛対日求和的政治環境與思想脉絡(1933-1938)」

中国社会科学院近代史研究所副研究員 李 志毓 氏

10月12日(木)

「英文による成果発信支援セミナー—英語による学術論文の発表:編集者が期待するもの
=Scholarly Publishing in English: What Editors Expect」

国立シンガポール大学出版会編集長 ポール・クラトスカ 氏

10月30日(月)

「アラブメディアが西洋メディアに及ぼした影響」

フランス国立東洋言語文化学院(INALCO)日本学部講師 Bassam TAYARA 氏

12月22日(木)

「対中国抗戦史学界“東方主戦場”論的評析」

上海社会科学院歴史研究所研究員 馬 軍 氏

3月10日(土)

“Chingizid and non-Chingizid elements of legitimation of rulership in Iran and neighbouring area”

オーストリア科学アカデミーイラン学研究所前所長 Bert G. Fragner 氏

3. 東洋文庫談話会

専門分野の若手研究者による成果報告会を実施した。

3月13日(火)

「中国人協力者の戦後:これまでの研究成果と今後の展望」

日本学術振興会特別研究員PD 関 智英 氏

4. 東洋文庫公開講座

様々な分野の著名研究者を国内外より招いて実施した。

5月13日(土) 東洋文庫超域アジア部門現代中国研究班 2017年度全体研究集会

「近刊『日中漂流』について」

東洋文庫研究員

早稲田大学名誉教授 毛里和子 氏

「近刊『順天時報』社論・論説目録』について」

東洋文庫研究員

亜細亜大学准教授 青山治世 氏

6月11日(日)

「震災後を生きる」

政治学者

姜 尚中 氏

7月16日(日)

「落語で知ろう！江戸の災害・防災」

落語家

三遊亭好吉 氏

7月30日(日)

「新史料で読む安政の大地震」

東京大学史料編纂所教授 佐藤孝之 氏

10月29日(日)

「シェルパ斉藤のオーストラリア紀行—こうして僕は紀行作家になった」

紀行作家・バックパッカー 斉藤政喜[シェルパ斉藤] 氏

12月16日(土) モリソン文庫渡来100周年記念国際シンポジウム

「碩学が語る東洋学の至宝のすべて」

総司会： 平野健一郎氏(東洋文庫普及展示部長・ミュージアム館長)

開会の挨拶： 斯波義信氏(東洋文庫文庫長)

Claire Roberts氏(メルボルン大学准教授)

“The Morrisons of Peking: Living History”

馬 軍氏(上海社会科学院歴史研究所研究員)

〈莫理循文庫東渡前後の中国反応〉

田仲一成氏(東洋文庫図書部長)

「『モリソン文庫貴重古籍目録』—欧人の中国研究に関する基礎資料」

岡本隆司氏(東洋文庫研究員・京都府立大学教授)

「『白眉』の運命—『モリソンパンフレットの世界』を上梓して」

パネルディスカッション「モリソン文庫の魅力を語り尽くす」

司会進行： 濱下武志氏(東洋文庫研究部長)

パネリスト： 中見立夫氏(東洋文庫研究員)、

フランソワ・ラショー氏(フランス国立極東学院教授・東京支部長)、

斯波義信氏、平野健一郎氏、岡本隆司氏、Claire Roberts氏、馬 軍氏

閉会の挨拶： 濱下武志氏

1月26日(金)

「『鳴情均化録』はどのように読んだらよいか—大澤訳注稿をふまえて—」 東洋文庫研究員 大澤正昭 氏

2月4日(日)

「布哇(ハワイ)移民史—出稼ぎから定住へ」

東京大学教授 矢口祐人 氏

2月15日(木)

「古地図のメタデータ—保存・活用のための事例報告:龍谷大学所蔵『混—疆理歴代国都之図』」

龍谷大学教授 岡田至弘 氏

2月18日(日)

「水没する樂園—環礁国の真実」

東京大学教授 茅根 創 氏

3月11日(日)

「色とりどりのハワイからの文学—移民とか戦争とか火山とか海とか」

早稲田大学教授 青山 南 氏

・以下のワークショップを開催した。

5月14日(日)・6月24日(土)

「気象予報士あまたつのお天気ラボ—めざせ! 気象予報士 大実験もある!」

気象予報士 天達武史 氏

7月23日(日)

「製本体験シリーズ第4弾! じゃばらの本をつくろう」

東洋文庫研究員 篠木由喜 氏

11月26日(日)

「Smell Voyage: 本の香りのワークショップ—きみだけの東方見聞嗅録を作ろう!」

愛知県立芸術大学非常勤講師 井上尚子 氏

東京大学ERATO特任助教 白須未香 氏

・以下のミュージアムイベントを開催した。

5月7日(日)・6月4日(日)

「遊んで学ぼう—地震の仕組み」

日本大学教授

伊豆原月絵 氏

日本大学工学部スチューデントキュレーター

6月18日(日)

「熊本支援チャリティ映画『うつくしいひと』上映会」

12月9日(土)

「西本智実イルミナート教育プログラム、オペラワークショップ」

2月11日(日)

「“文の京コミュニティコンサート” フルート&ハーブデュオコンサート」

5. 参考情報提供

調査研究による研究成果をはじめ東洋文庫の活動全般に関する年次報告書として、下記の刊行を行った。

『東洋文庫年報』2016年度版

A5判 1冊(刊行済)

B. データベース公開

2017年度は、引き続き洋装本漢籍などの書誌データの補充のほか、貴重洋書の全頁資料、絵画、地図などの画像データのデジタル化を進め、本格的な東洋学多言語貴重資料のマルチメディア電子図書館の構築を目指した。

2017年4月1日～2018年3月31日までの期間における、東洋文庫の図書・資料のデータ(日本語・英語)に対するオンライン検索アクセス状況については、別添資料の通りである。

C. 海外交流

フランス極東学院および中華民国中央研究院、ハーバード・エンチン研究所、アレキサンドリア図書館、イラン議会図書館、SOAS、ベトナム社会科学院漢喃研究所との学术交流を進め、資料・情報の交換と研究者の相互訪問を継続的に実施した。

なかでもハーバード大学アジア研究図書資料館であるハーバード・エンチン研究所とは、2010年10月に交流協定を結び、資料交流・人材交流のみに止まらず、共同研究ならびにそれらを通じた若手人材育成を共同で行う取り組みを開始しており、それらを一層推進した。

また、12月16日(土)に《モリソン文庫渡来100周年記念国際シンポジウム》として「碩学が語る東洋学の至宝のすべて」を開催した。

V. 学術情報提供

東洋文庫は、日本における東洋学の共同利用の研究機関であると同時に、国内外の研究者並びに研究機関との連絡に当たって今日に至っている。従って、学術情報の提供に関する下記の諸事業は東洋文庫として最も力を入れているところである。

A. 図書・資料の閲覧(協力)サービス

広く一般に開放された無料の閲覧室の運営を行った。

数量/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
書庫利用者人数	27人	33人	53人	30人	44人	63人
閲覧者人数	130人	156人	199人	183人	170人	186人
閲覧図書数	1,793冊	2,385冊	3,664冊	2,119冊	2,920冊	2,463冊
レファレンス数	35件	42件	54件	49件	46件	50件

10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
47人	31人	19人	37人	47人	37人	468人
176人	168人	194人	157人	206人	197人	2,122人
2,225冊	2,336冊	2,360冊	1,606冊	2,280冊	2,457冊	28,608冊
48件	45件	52件	42件	56件	53件	572件

B. 研究資料複写サービス

	申し込み件数	焼付枚数
マイクロフィルム・紙焼写真	109件	
電子複写	927件	27,155件

C. 情報提供サービス

刊行物の全文データ公開を随時更新した。

D. 展示

広く一般多数の方々を対象とした東洋学の普及を図る手段として、「東洋文庫ミュージアム」を運営した。

1. 基本方針

このミュージアムでは、特に東洋学に興味を持たない一般の方々を主な対象とし(中学生程度の歴史知識を前提)、これらの利用者、ミュージアム見学を通して東洋学に興味を持つ機会を提供するものである。本ミュージアムは、東洋文庫の蔵書・史料を中心に種々の展示企画を組み立て、常に新たな発見と変化のある展示を心がけている。

2. 展示手法

広く一般の方々にミュージアム訪問の興味を喚起するため、①見学に適切な規模の展示内容とし、②展示の解説は日頃東洋学とは疎遠な利用者にも十分理解できる簡易なものとし、③デジタル技術等を取り入れた視聴覚的かつ斬新な展示で利用者の興味を引くことに努めた。

3. 施設

温度・湿度管理、窒素ガス消火設備運用により、展示図書・資料の保全に万全を期している。また、併設のギフト・ショップ、ミュージアム・カフェでは、東洋文庫の所蔵資料も紹介し、一般利用者に対してミュージアムの魅力を高め、東洋学普及の一翼を担う、ミュージアムの一体施設として運営した。

4. 展示スケジュール

常設展と企画展の組み合わせからなる展示スケジュールを立て、以下の展示を開催した。

a) 常設展は国宝と浮世絵を中心に構成されており、保存と集客の観点から毎月初めに展示資料の入れ替えを行った。

b) 以下の展示を開催し、展示図録を発行した。またモリソン文庫渡来100周年にあたり、『東洋見聞録』

G. E. モリソン特集号を発行した。

〈企画展〉

①「ロマノフ王朝展－日本人の見たロシア、ロシア人の見た日本」(2017年1月7日～4月9日)

②「ナマズが暴れた！？安政の大地震展－大災害の過去・現在・未来」

(2017年4月19日～8月6日)

③「東方見聞録展－モリソン文庫の至宝」(2017年8月16日～2018年1月8日)

④「ハワイと南の島々展」(2018年1月18日～5月27日)

〈常設展〉

「記録された記憶～東洋文庫の書物からひもとく世界の歴史」

c) 各企画展において展示図録を作成した。全ページカラーで画像を多用し、解説文も平易なものわかりやすいものに仕上げた。A5版でハンディなブックレットタイプである。

d) 上記企画展会期中に公開講座(企画展示記念講座)を開催した。

IV. 普及活動－4. 東洋文庫公開講座を参照。

e) 六義園特別展示「六義園をめぐる歴史」を開催した。

会期：①3月15日～4月9日

②11月15日～12月4日

会場：東洋文庫ミュージアム1階オリエントホール

5. ガイドツアー

ミュージアムへの来客サービス・集客戦略の一環として、館内ガイドツアーを実施し、好評を得た(開館期間は毎日15時に開催した)。

6. ミュージアム諮問委員会

ミュージアムの運営について外部有識者の意見を取り入れるため、新たにミュージアム諮問委員会を設置し、2017年11月9日(木)に委員会を開催した。

7. 成蹊大学図書館での展示

東洋文庫の貴重書を大学図書館入口にて常設展示した。

8. 文京区向けの普及活動

a) 7月25日 公益財団法人文京アカデミーの主催で、「区制70周年記念・文京ミュージズネット親子講座：六義園・東洋文庫講座「歴史と香りの世界旅行！」」を開催して、書庫見学及び本の香りの講座を行った。

b) 8月23日 文京区社会科部研究部会からの依頼で、学芸員が発表を行った。

c) 12月14日 文京区の「文の京ミュージアムネットワーク」の加盟施設による「文京ミュージズフェスタ」(各施設による展示・体験コーナー、PRポスター、パネル等の掲示)に参加した(於 文京区役所1F)。

9. 図書展示コンサルティング

ミュージアムにおける図書資料展示の経験を役立てるため、学芸員が下記の図書館・団体にて講演と実演を行った。

- a) 6月30日(金) 専門図書館協議会全国集会分科会(於 機械振興会館)

10. 入場者数

2017年4月1日～2018年3月31日における、ミュージアム総入場者数は以下のとおりである。

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
入場者数	3,877人	2,222人	2,189人	3,674人	2,635人	2,655人	2,449人	3,939人	3,743人

1月	2月	3月	計
2,966人	1,667人	2,700人	34,716人

E. 普及広報

東洋文庫所蔵の図書・史料の掲載・報道・放映等の依頼に適宜対応すると共に、ホームページを随時更新し、利便性を確保した。東洋学の若年層への普及を目指し、学校連携活動も行った。

1. 要人の訪問

ローラン・ピック駐日フランス大使、リチャード・コート駐日オーストラリア大使、ウィリアム・F・ハガティ 駐日米国大使、グスタボ・アジャレス駐日チリ大使、ハートウィグ・フィッシャー大英博物館館長、国際学士院連合一行他。

2. 関連書籍の刊行

モリソン文庫渡来100周年を記念し、下記3冊の刊行物を出版した。

『東洋見聞録』G. E. モリソン特集号

『モリソンパンフレットの世界』(東洋文庫論叢81)

A Classified Catalogue of The Morrison Library in Toyo Bunko. Vol.1

『G.E.モリソンと近代東アジア：東洋学の形成と東洋文庫の蔵書』(勉誠出版刊)

3. 報道実績

ミュージアムに関する報道実績の主なものを以下に挙げる(50音順)。

新聞：『産経新聞』、『毎日新聞』、『読売新聞』など。

テレビ：テレビ和歌山『東京つうしん』(2017年11月8日(水)放送)にて、東洋文庫が紹介された。

4. 『東洋見聞録』

東洋文庫の活動をご支援頂いている「名誉文庫員」、「友の会会員」、職員OBほか関係者をつなぐニュースレターとして発行・頒布した。

5. メールニュース

東洋文庫ミュージアムのメールニュースをメール会員向けに毎月発信した。

6. 小学生・中学生・高校生・大学生向けの学習支援・普及活動

a) インターン制度により、第Ⅵ期(2017年2～4月)2名、第Ⅶ期(5月～8月)1名、第Ⅷ期(10月～2018年1月)1名に対し、学芸員が就業体験を実施した。

b) 4月28日 東京都小石川中等教育学校(スクールパートナーシップ提携校)の中学1年生40名に対し、校外学習(ミュージアム見学・職場インタビュー)を実施した。

- c) キャンパスパートナーシップ提携校である青山学院大学文学部の学生2名（6月27日～7月6日）、東洋大学文学部の学生2名（11月29日～12月7日）に対し、学芸員が博物館実習を行った。
- d) 文京区立駕籠町小学校の社会科授業を、学芸員が2回にわたり行った。（6月15日：縄文時代～平安時代、7月11日：解体新書を中心とした江戸期文化史）
- e) 10月31日 文京区立駕籠町小学校2年生の授業「まちたんけん」に学芸員が対応した。
- f) 11月10日 筑波大学附属視覚特別支援学校 中学部 男子2名に対し、東洋文庫ミュージアム運営に関する職場体験を実施した。
- g) 11月15日～17日 東京都小石川中等教育学校（スクールパートナーシップ提携校）の中学2年生2名に対し、学芸員他が職場体験を実施した。

7. モリソン文庫調査委員会

2017年にモリソン文庫渡来100周年を迎えるに当たり、2015年度に立ち上げたモリソン文庫調査委員会において、記念出版、特別展示および国際シンポジウムを開催した。

8. 文化勲章受章

斯波義信文庫長が文化勲章を受章された。

9. 長崎大学との連携

長崎大学が多文化社会学研究科（修士課程）を設立するにあたり、パートナーシップを組むべく協定書を締結した。

10. 東洋文庫アカデミア

東洋文庫研究員をはじめとする各分野の専門家が講師となり、所蔵資料やこれまでの研究成果などの専門知識をわかりやすく教授する市民向け講座を下記のとおり実施した。

講座名	講師(所属)	期間	人数
糸でかがる一洋製本の世界Ⅱ	平まどか・羽田野麻吏・中村美奈子(レ・フラグマン・ドゥ・エム)	2017年4月8日	3
西夏文字を読む	荒川慎太郎(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所准教授)	2017年4月15日, 4月16日	22
イスラーム美術の細密画	青木節子(トルコ細密画と文化史の会)	2017年5月8日 ～7月24日	2
初歩の水墨画講座—十二支を描く・午～亥年—	伊藤忠綱(二松学舎大学非常勤講師)	2017年5月13日 ～7月22日	9
イランの芸術—ペルシア書道に親しむ「シャーナーメ(王書)」	角田ひさ子(拓殖大学言語文化研究所講師)	2017年5月20日 ～7月29日	10
糸でかがる一洋製本の世界	羽田野麻吏・中村美奈子(レ・フラグマン・ドゥ・エム)	2017年8月27日	13
続ゼロから始めるロシア語入門	畔柳千明(東京大学大学院)	2017年5月19日 ～7月28日	3
曹操の文学と『文選集注』	渡邊義浩(早稲田大学文学学術院教授)	2017年4月29日	7
中国医学史散策—真の<癒>を求めて	角屋明彦(明治大学法学部非常勤講師)	2017年5月13日 ～6月3日	22
秦の考古学—秦文化発祥から始皇帝まで—	飯島武次(東洋文庫研究員・駒澤大学名誉教授)	2017年5月20日 ～7月1日	4
あなたにもできる校正・校閲	中村威也(東洋文庫研究部・跡見学園女子大学兼任講師)	2017年9月6日 ～9月27日	10
禅の語録を読む	小川隆(駒澤大学総合教育研究部教授)	2017年9月30日, 10月1日	10

モンゴルと満洲から見た近現代のアジア	宮脇淳子（東洋文庫研究員）	2017年9月30日 ～12月9日	30
敦煌の歴史と文化	關尾史郎（東洋文庫研究員・新潟大学人文社会教育科学系フェロー）	2017年10月4日 ～10月25日	4
第4回現代中国理解セミナー	古田和子（慶應義塾大学経済学部教授）、リンダ・グローブ（上智大学名誉教授）、梶谷懐（神戸大学大学院経済学研究科教授）、末廣昭（学習院大学国際社会科学部教授・学部長）、木村福成（慶應義塾大学経済学部教授）、丸川知雄（東京大学社会科学研究所教授）	2017年10月4日 ～11月15日	134
学術刊行物のための編集術・校正技術	中村威也（東洋文庫研究部・跡見学園女子大学兼任講師）、小澤一郎（東洋文庫研究部）	2017年10月14日、 10月15日	20
初歩の水墨画講座—風景を写生する—	伊藤忠綱（二松学舎大学非常勤講師）	2017年9月9日 ～11月25日	13
イスラーム美術の細密画	青木節子（トルコ細密画と文化史の会）	2017年9月11日 ～12月25日	2
イランの芸術—ペルシア書道に親しむ「作品を創る」—	角田ひさ子（拓殖大学言語文化研究所講師）	2017年9月16日 ～12月2日	5
ペルシア語の世界：入門編	渡部良子（東京大学文学部非常勤講師）	2017年9月30日 ～12月9日	6
ペルシア語の世界	渡部良子（東京大学文学部非常勤講師）	2017年10月4日 ～12月13日	4
イスラーム美術の細密画	青木節子（トルコ細密画と文化史の会）	2018年1月22日 ～5月28日	3
初歩の水墨画講座—風景を写生するII	伊藤忠綱（二松学舎大学非常勤講師）	2018年2月10日 ～4月28日	12
中国の漢字と古代エジプトの聖刻文字を巡る文字論の世界	永井正勝（東京大学特任研究員）	2018年2月10日	14
新しい中国古代史を描いてみよう—考古資料・石刻資料・環境史	村松弘一（歴史学者・元学習院大学教授）	2018年1月31日 ～3月14日	3
『論語』で学ぶ満洲語—文献史料類を読むための満洲語文語入門講座：初級篇	石橋崇雄（東洋文庫研究員）	2018年2月2日 ～5月11日	6
イランの芸術—ペルシア書道に親しむ—シャーナーメ（王書）2	角田ひさ子（拓殖大学言語文化研究所講師）	2018年2月3日 ～4月21日	6
エブル（トルコのマーブリング）作成体験講座	高坂雅子（エブルの会）	2018年3月17日	6

F. 国際交流

東洋文庫は、フランス極東学院、台湾中央研究院、ハーバード・エンチン図書館、ハーバード・エンチン財団、アレキサンドリア図書館、イラン議会図書館、SOAS、ベトナム社会科学院漢喃研究所と協力協定を締結しており、これらを中心に国際交流を推進した。

G. 研究者の交流および便宜供与のサービス

1. 長期受入

(1) 外来研究員の受入

フランソワ・ラショウ (フランス国立極東学院 東京支部長)

「近世日本の美術史・宗教史(蒐集家と文人のネットワーク、黄檗文化等々)、「近世期の東アジアの交流史(日本・中国・ロシア・西欧)」

(2017年3月15日～2019年3月14日)

馬 軍 (上海社会科学院 歴史研究所 研究員)

「東洋文庫と近代中日学術交流について」

(2016年10月1日～2017年5月31日)

[受入担当：小浜 正子]

呉 真 (人民大学 中文系 副教授)

「中国古代戯曲演劇史」

(2017年7月3日～2017年9月3日)

(2018年1月12日～2018年2月27日)

[受入担当：田仲 一成]

張 新超 (西南大学 歴史文化学院 民族学院)

「秦漢地方行政制度、秦漢法制史、出土文献」

(2017年9月1日～2018年8月31日)

[受入担当：池田 雄一]

(2) 2017年度日本学術振興会特別研究員PDの受入

関 智英(東京大学大学院 PD)

「戦時時期中国人対日協力者(和平陣営)の戦後の活動と思想」

(2015年度採用、16・17年度・3カ年間)

[受入指導者：久保 亨]

※2018年3月31日をもって受入終了

(3) 2017年度東洋文庫奨励研究員の受入

なし

2. 外国人研究者への便宜供与

各国より東洋文庫を訪問する外国人研究者に対し、調査研究上必要とされる便宜供与を行った。

Australia Claire ROBERTS [Associate Professor, Art History and Australian Research Council Future Fellow, School of Culture and Communication, The University of Melbourne]

China 雷晋豪[香港教育大学文学及文化学系助理教授]
陳偉強[香港浸会大学文学院中国語言文学系教授]
史梅[南京大学博物館行政副館長兼任図書館副館長](他5名)
程彤[上海外国語大学教授]
王建朗[中国社会科学院近代史研究所所長](他2名)
侯旭東[清華大学教授](他3名)
李志毓[中国社会科学院近代史研究所副研究員]

Deutschland Esther Chen [Head of Library, Max-Planck-Institut für Wissenschaftsgeschichte] (他1名)

France Bassam Tayara [フランス国立東洋言語文化学院日本学部]

- Korea 韓盛旭[民族文化遺産研究院院長](他 3 名)
- Taiwan 許雅惠[国立台湾大学歴史学系副教授](他 5 名)
李志鴻[中央研究院歴史語言研究所博士候補生]
冷則剛[中央研究院政治学研究所所長](他 3 名)
吳密察[国史館館長](他 2 名)
- Mongolia Sampildondov Chuluun[Director Professor Head , Institute of History and
Archaeology, Mongolian Academy of Sciences](他 1 名)
- Saudi Arabia Saud Al-Sarhan [Secretary-General, King Faisal Center for Research and
Islamic Studies](他 3 名)
Farida Al-Husseini [Museum Curator, King Faisal Center for Research and
Islamic Studies]
- Singapore 李焯然[シンガポール大学中国文学系教授]
Ang Seow Leng [シンガポール国立図書館・Senior Librarian]
- USA 林孝庭 [Research Fellow, Hoover Institution](他 1 名)

2017年度 公益財団法人東洋文庫特別事業報告書

公益財団法人 東洋文庫
理事長 榎原 稔

2017年4月1日から2018年3月31日までに行われた公益財団法人東洋文庫特別事業の概要は、下記の通りです。

事業内容

特別調査研究並びに研究成果の編集等

A. 日本学術振興会科学研究費補助金による事業

1. 研究成果公開促進費(データベース、学術図書)の対象事業

①研究成果データベース

「東洋学多言語貴重資料のマルチメディア情報システム」

[研究代表者:東洋文庫電算化委員会委員長:斯波 義信]

(2014年度採用、5ヶ年・第4年度)

②学術図書

「墓誌を用いた北魏史研究」

[申請者:窪添 慶文]

2. 基盤研究(B)の対象事業

「戦前・戦中期における華中・華南調査と日本の中国認識」

[研究代表者:本庄 比佐子]

(2015年度採用、5ヶ年・第3年度)

「イスラーム地域における物質文化史の比較研究～イベリア半島から中央アジアまで～」

[研究代表者:真道 洋子]

(2016年度採用、5ヶ年・第2年度)

「寄進とワクフの国際共同比較研究:アジアから」

[研究代表者:三浦 徹]

(2017年度採用、4ヶ年間・第1年度)

3. 基盤研究(C)の対象事業

「宋～明代日用類書の基礎的研究」

[研究代表者:大澤 正昭]

(2015年度採用、4ヶ年・第3年度)

「モロッコ皮紙契約文書(ヴェラム文書)の国際共同研究」

[研究代表者:原山 隆広]

(2016年度採用、3ヶ年・第2年度)

「渭河流域における秦文化成立の考古学的研究」

[研究代表者:飯島 武次]
(2016年度採用、3ヶ年・第2年度)

「国民国家建設期の東南アジアにおけるマレー・ムスリムのネットワーク」

[研究代表者坪井 祐司]
(2017年度採用、3ヶ年・第1年度)

「12世紀アイユーブ朝における言論と伝達--書簡資料の利用による」

[研究代表者:柳谷あゆみ]
(2017年度採用、3ヶ年・第1年度)

以 上